

「ドメスティケーション・モデルの構築 - 博物学の視点から」 奈良研究会開催

2月15、16日の2日間、総合研究大学大学院・葉山高等研究センターの特任研究員の秋篠宮殿下を代表者とする上記の研究会が奈文研小講堂と文化財資料棟とで開催されました。この研究会は文化系・理科系のさまざまな機関に所属する研究者、約30名から構成されています。

ドメスティケーションとは、家畜・家禽化のこととで、野生動物が人間に飼われるようになり、現在見るように、さまざまな形で人間の役に立つ家畜になって、独特の文化を形成するにいたったモデルを構築することを目標としています。この奈文研での研究会は、日本列島における犬の起源とその文化をテーマにしたもので、家犬が1万年以上前にアジアのどこかでオオカミが飼い慣らされ、日本列島へも古い段階で連れてこられ、現生の柴犬へと移行したことを軸に議論が進みました。

その発表は、骨の形態学、古DNA分析による遺伝学、安定同位体による食性分析などの生物学的アプローチと、考古学、歴史学、社会学などからの文化的アプローチが組み合わされたものでした。特に殿下からはしばしば得た質問やコメントが出され、この問題に対するみなみならない知識と熱意を感じられました。

また研究会の後、秋篠宮殿下を中心に第一次大極殿正殿の復原工事現場を視察することができ、参加者は皆、奈文研での開催に満足して解散することができたと思います。（埋蔵文化財センター 松井 章）



研究会終了後、平城宮跡資料館前にて

退職者のひとこと

定年を迎えて(やった定年だ！)

1974年の入所以来、平城地区で13年間、飛鳥藤原地区で20年間の計33年間を一貫して発掘調査研究部門で過ごせたことは、私にとっては奇跡のように思われます。入所から数年間は、先輩方と議論をし、意見が通らないと



川越俊一さん

若気のいたりから、「辞めたるわ」と捨てゼリフを残していたようです。もちろん、私はそのような無礼な態度を取った記憶は全くないのですが、先日も大先輩にお会いした時に、「あんたまだ勤めとったん」と声を掛けられ、どっと冷や汗が出るのを感じました。無事にここまでこれたことは先輩をはじめ、皆様のおかげと心より感謝しています。

研究所での業務の大半は、発掘調査とその整理に費やしました。発掘調査では、参加した各遺跡それぞれに思い入れがあります。今でもその時のメンバーの表情を含めて、進行状況がイキイキと蘇ってくるようで、誰もが羨むような第一級の遺跡の発掘調査に今後直接係れないことへの寂しさを感じる今日この頃です。

この33年間、皆様の御指導と助力によって、やりたいことをやらせて頂き、言いたいことを言わせて頂きました。本当にありがとうございました。

（都城発掘調査部長 川越 俊一）



山田寺南門の調査での一コマ(1989年)